

夏休みの終わりは、あまりいい思い出がない。学生時代、ほったらかしにしておいた宿題を急いで片付けなければならなかったからだ。今やらなければならぬことを先延ばしにしてしまおうという性格は一生直らないのだろうか。

心理学者のウォルター・ミシエルが、1960年代にアメリカのスタンフォード大学にあるビング保育園において、「マシユマロ・

「マシユマロ・テスト」が意味するもの

た。ミシエルは、参加者の子どもたちを10年ごとに追跡調査し、マシユマロを2個もらうために我慢ができた子どもは、そうでなかった子どもに比べて、将来学校の成績が良く、成人してからは社会的適応力が高いという事実を発見した。

有能な政治家が異性問題で失脚した、トップ・アスリートが暴力事件を起こした、というゴシップ記事は後を絶たない。これらの政治家やアスリートは普段は信頼できる人々であり、一般人の人々の何倍も辛抱強さが要求される仕事をしている。ただ彼らは、異性からの誘惑に弱い、プライドが高い、などの弱点があり、このような特定の条件下ではホット・システムが優位になって目先の報酬に抗うことができなかつたのである。心理学の研究によると、この特定の条件というのは人によって違いはあれ、一貫して持ち続ける性質のようである。

経済学においても似たような研究がある。例えば、今日1万円もらうか、1週間後に1万5000円もらうかどちらにしますかという質問を被験者にする。このような質問に対し、多くの被験者が今日得られる1万円を選ぶ。しかし、質問が1年後に1万円もらうか、1年と1週間後に1万5000円もらうかという選択肢であるなら、1年と1週間待って1万5000円をもらうことを選ぶ。どちらの選択肢もたった1週間の違いであるのに、なぜ直近の事柄に関する選択肢と将来の事柄に関する選択肢では回答が違うのか。

先延ばしする 心理の構造

テスト」という興味深い心理学実験を行った。園児たちは、今すぐマシユマロを1個もらうか、研究者が戻ってくるまでベルを鳴らさずに待つて2個もらうか、という選択肢を与えられ



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授
濱口 泰代

fMRIを用いた脳科学研究によると、脳は即時の報酬の選択肢に対しては原始的な脳の部位である大脳辺縁系(ホット・システム)で反応し、現在よりかなり先の報酬の選択肢に対しては、進化的により発達した部位である前頭前皮質(クール・システム)で反応することではなく、本気で変えたいと思わなければ大事なことを先延ばしにしてしまう性格は変わらないようである。

はまぐち・やすよ 実験経済学。
大阪大学大学院経済学研究科博士
後期課程修了。博士(経済学)。
1970年生まれ。

